

し嚮のごときは、その形なきをもて眼を害せり、○中

按るに、人の精神よく丹田に修まるときは、怪しきを見ても懼れず、變に遇ても迷ふことなし、既に蘇老泉が詞にも、爲將之道當先治心、泰山崩於前、而色不變、麋鹿興於左右、而目不瞬、然後可以制利害、可以待敵云々と見えて、これ將帥に限るにあらず、されば一念不動とは、佛説にも見えたるなり、爰にそのむかし、或人の許に、下女一人を抱へたるが、這は近き頃、在所を出て、更に世間のことを去らず、所謂野馬出しと唱ふる者なり、故にこの家に出入すなる若者等、うち集ひて、或は侮り、あるひは欺き、常にこれを消遣といへども、彼敢て心とせず、一時若者等いひ交し、彼を驚かしめて慰まんと、はや黄昏るゝときに及び、物求めに出るを幸ひ、路の傍樹立茂き所に隠れて、これを俟つ、下女は何心なく使にゆき、日も暮ぬと足を早めて、その所を通りかゝるに、豫て期したる事なれば、往過るや否や、やといふて、吾だに駭く大聲を出し、威したれども、さうらに動せず、優然として往ければ、威したる者興を失なひ、寥々後より歸り來て、その容を物がり、餘の人に問するに、彼下女答へていへるやう、己在所を出るとき、天満宮の影像を母の興へて侍らひき、且教へていふ、この尊影を旦暮に信する時は、いかなる惡魔も近付べからず、万一遍れがたき災の身に至らんとするときは、尊影これに換り給ふ、努怠らず信じてもて、無事を祈るべしとありければ、夫より以降、これを信じて晝夜肌を放すことなし、然ればいかならん事のありとも、聊懼るゝ心なしと、その人に語りしといふ、これ苟のやうなれど、爰に深き味ひあり、言辭を以て宣べ難し、凡そ佛道修行の人、鬼魅魍魎の屬ひ、及び天變地妖も強に恐るゝ、ことの寡きは、心に修する所あればなり、彼伊川先生が、風浪に遇て泰然とさらに懼るゝ、の色なきごときは、また甚高いかな、

〔奥州波奈志〕影の病。